

設計 磯崎新。ロコタイプ及びサインデザイン・マリスカル。この組合せをバルセロナ五輪のスポーツホールの設計者と公式マスコット「コト」の生みの親として「記憶の方も多いと思う。そしてこのキャスティングが再び、しかもこの静岡の地において実現したことにあらためて驚きの声をあげる人も少なくないに違いない。

グランシップの東から西まで、新幹線で通り過ぎると、その間11秒。磯崎氏はそのわずかな一瞬に印象づける建物であることが必要だったと語った。なるほど、確かにこの存在感は絶大だ。新幹線の車窓から何気なく外の景色を眺めていた人々はまさに虚をつかれ、そして、思わずこう呟くこと

だろう。これは一体、何なんだ？と。残念ながら、新幹線で通過するだけの乗客にこの内部を知るチャンスはそう多くは訪れない。その点、静岡県に住む人々はいくつだて気軽に outgoing、いろいろ見て回ることができ。これは幸運なことだ。なにしろ世界中から声がかかるほどの建築家が手掛けた建物である。空間設計の見事さ、も、細部へのこだわりも、想像以上。巨大な船にも似た外観もさることながら、しなやかな感性と緻密な計算が見え隠れする内部もまた、一見の価値あり。もちろんグランシップのそこかしこで出会う、マリスカル氏らしい肩のチカラの抜けた館内サインも見だ。基本的にはグランシップは定期休館

ブラリと覗くか、ガイド付きで見学するか。アートな建築空間探訪のススメ。



日本では大分のピーコンプラザや水戸芸術館、海外ではロサンゼルス現代美術館やチーム・ディズニー・ビルディングなどを作品に持つ磯崎新氏による設計とあって、内外の関心も高いグランシップ。磯崎氏いわく「三保の松原や富士山など、静岡は日本の古代的景観をもっている。とりわけ奈良や京都にはない雄大さがある。こういうスケールを今回のデザインの手がかりとした」。各ホールの設計はもちろん、エレベーターホールやロビー、ホワイエなどのデザインについても、ぜひ注目してほしいところ。



晴れた日には富士山の美しい末広がりが見える10階展望ロビー。ちょっとしたサロンの雰囲気、今では隠れた人気スポットの一つになっている。
利用時間 / AM9:30 ~ PM9:00



SPECIAL 1

グランシップX倍活用術

HOW TO GRANSHIP

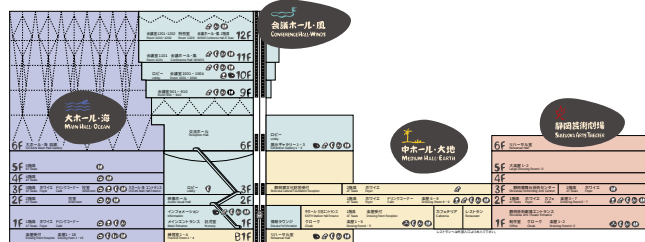


ある朝目覚めて、もしも何の予定もない一日だったら、
グランシップへ出掛けてみるのはどうだろう。
イベントに参加するのでも、公演を見に行くのでもなく。
ただ、ぶらりと。近所のお店やギャラリーを覗くような気分で。
カフェでのんびりしたり、展望ロビーで富士山を眺めたり。
情報ラウンジでビデオを1本見て帰るのもいい。
そこにはイベントや公演日のホールやシアターとは別の、
もう一つの景色、もう一つの時間が流れているような気がする。
日常の空気の中にあるグランシップ。
それはきっともつと気さくで親しみやすいから
ここに魅力のすべてを総特集。
グランシップをX倍に活用し、堪能していただくための
HOW TO GRANSHIP
休日のあなたに捧ぐ。

ARATA ISOZAKI X MARISCAL



左・中央 / 単なる座席表もマリスカルの手にかかるとこんな感じに。行く先々に表示があるので途中で不安にかられることもなく、また、それ自体がアートな感覚を持つので空間の雰囲気を邪魔することもない。右 / 目の不自由な方のために館内には点字でのサインも。



ガイド付き見学のモデルコース 映像ホール→ 映像ホール前ロビー→ メインエントランス→ 会議ホール→ 10階ロビー→ 展示ギャラリー→ 交流ホール→ 大ホール回廊→ 大ホール4階席→ 3階ロビー→ 大ホール1階席→ 中ホール 所要時間約1時間15分。都合により短縮も可能。人数をとりまとめて、事前に予約を。問い合わせは、静岡県文化財団総務課：TEL054-203-5713まで。



エントランスホールに入って、まず目につくのがこのサイン(右)。スペインを代表する世界的現代アーティスト、マリスカルらしい、ちょっとユーモラスでやわらかな表情が訪れる人の肩のチカラをスーツと抜いてくれる。以前、ここを訪れた作家村松友視氏も「こういうあたたかさ、人間らしさは本質的な意味で静岡らしい。この文字の雰囲気は、今後、相当の意味を持ってくるんじゃないかな」と評価。



いわゆる多目的トイレで、車椅子の方にはもちろん、ベビー連れに便利。広いスペースの中でゆったりおむつ替えができる。また、折りたたみ式フィッティングフロアもあり、ちょっとした着替えに利用できる。1階ではメインエントランスから入った突きあたりにある。



地下1階にある練習室(上)は大小4つ。男女別更衣室やシャワー室もある。また、6階の展示ギャラリー(下)は3室で構成され、3つを合わせて大きな空間として使用することも、また1室だけを利用することもできる。最も広い1室は可動パネルによる展示空間の自在なアレンジが可能。ジャンルにとらわれない、多彩な作品発表のスペースとして芸術文化活動をサポートする。(施設利用の料金、申し込みについてはP25、P27を参照)



グランシップ広場の西側にある駐車場には、およそ400台を収容。公演の終了時には、館内エントランスに設置されている駐車料金精算機(右)で精算を。



託児システムも、巡回バスも。
知らないきやソン！のサービスあれこれ。



このトイレサインがカワイイと評判。



グランシップ内のトイレは全部で実に115ヶ所。



使
い

あるミュージシャンがグランシップを訪れたときにこう言った。グランシップは静岡県民のもの、どこかの壁の一部にあなたの税金が使われているかもしれないだから、利用しなきゃソンだよ。トイレだって、何だってね。

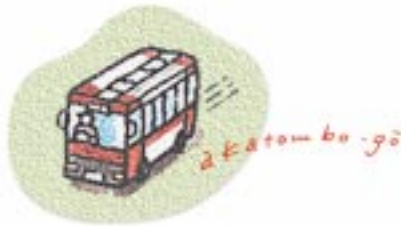
て、公演がおわるまで預かってくれる。残念ながら、グランシップで催されるすべてのイベント・公演で利用できるというわけではないが、告知チラシ等にサービスの有無が記載されているのであらかじめ確認しておきたい。それからもう一つ、「赤とんぼ号」という名の巡回バスをご存知だろうか。これはグランシップと、有度山にある舞台芸術公園、県立美術館等の学術・文化ゾーンを巡回する無料バスで、毎週日曜日に運行している。舞台芸術公園で演劇を楽しんだ後、グランシップに立ち寄り、美術館を覗いたりという際、実に効率よく、便利だし、JR東静岡駅・JR草薙駅を経由するのでアクセス面でも好都合。その上同乗のトラベルスタッフがそれぞれの施設を説明してくれるし、

イベント情報などもおしえてくれる。もちろん、こうしたサービスだけでなく、施設そのものを借りて使ってみると、いろいろのいいことがある。なにしろこれだけの器である。ホールや会議室だけでなく、個人レベルで利用できるメニューもちゃんとある。なかでもおすすめなのが練習室。そこには音楽や演劇の練習に最高の環境が整っているうえ、気になる使用料についても、たとえば午前中3時間借りると1,200円、丸一日借りても4,700円と意外に安い。P25料金表参照。また、趣味の仲間で作品展というときには展示ギャラリーが役立つ。

なんてハードもソフトも使ったモン勝ち。利用すれば利用するほど、グランシップは身近なものになるはずだ。



絵本や玩具、ベッド、トイレ、バスなどが完備した託児室。静岡県文化財団が主催する公演の場合、2歳～小学校就学前の幼児が対象で、ありがたいことに無料。スタッフは全員、保育資格を持つグランシップサポーター。利用を希望する場合は事前に、静岡県文化財団企画広報課:TEL054-203-5714まで相談を。



無料巡回バス「赤とんぼ号」は、平成12年3月26日までの毎週日曜日、AM9:00～PM5:00(最終バスはJR東静岡駅PM4:30発)運行。ダイヤは下の表の通り。

	JR東静岡駅	舞台芸術公園	県立美術館	JR草薙駅	JR東静岡駅
毎時	00	15	30	40	50
	30	45	00	10	20

12時台は下段、13時台は上段のみの運行。ダイヤは変更になる場合があります。

カフェテリア SAN



白に木目のブラウンのインテリアが落ち着いた雰囲気漂わせる『燦』。クローズタイム(PM7:30 ~)を利用したパーティーも受け付けている。完全立食スタイルなら100名までOK。

カフェテリア『燦』
OPEN / AM9:30 ~ PM7:30

人気メニューベスト5

- 1 本日のオリジナルケーキセット
(ケーキ2種 + ドリンク) 750円
- 2 ルネッサンス風中世ケーキセット
(ケーキ + ドリンク) 900円
- 3 ホットケーキ 450円
- 4 クリームあんみつ 550円
- 5 ツナ、トマトのオープンバーガー 580円



ときにはこのスマイルに会いに行くのも悪くない。

こちらは『燦』おすすめのルネッサンス風中世ケーキ(600円・セットでは900円)。中世の貴婦人たちが愛したほのかな甘味のケーキが折々に楽しめる。写真は「 シャロットマリーアントワネット 」。甘味には、日本では手に入りにくい「羅漢果」を使用。シェフのこだわりであるデリケートなおいしさが魅力。



このほか、季節のフルーツとアイスクリーム(550円)も隠れた人気メニューの一つ。静岡ならではのテイストも体験の価値アリ!



人気ナンバーワンのオリジナルケーキセット(750円)は、7種類のケーキの中から好きな2種類をチョイス。木いちごとアングレズソースのデコレーション、ドリンク(コーヒー、紅茶、ハーブティーのいずれか)が付いたお得なセット。なかでも抹茶とレアチーズのケーキは人気。



幕間にはホワイエでちょっと一杯。

コンサートの開演前やステージの幕間にホワイエを上手に活用できるようになれば、観客としても一歩前。グランシップには、ホールごとにホワイエが設けられているので、出演者が楽屋で一息つくこの時間、観客もワインやお茶でしばしブレイク。



大ホール3階



大ホール1階



中ホール



静岡芸術劇場

ルネッサンス風ケーキにブームの兆し。



味わう

どこかアーティスティックな空気もぐと馳走。
ここだけのおいしさに出会う。

シアターやコンサートホールと同じ屋根の下にあるカフェ、レストランは、公演前の待ち合わせ、あるいは腹ごしらえのためのもの、というイメージがある。もちろん、そんな風利用することは決して悪いことではなく、むしろ大歓迎ではあるけれど、たまには公演を目的とするのではなく、カフェやレストランそのものを目的に出掛けてみるのも悪くない、という気がする。何と云っても、開演の時間を気にすることなく、ゆったりできるのがいい。ガラス越しに行き交う人を眺めながら、ゆっくりとランチや午後のティータイムを楽しむ。すると、お皿の上に盛り込まれた旬やコトコトの香りにふと心が留まる。時間も穏やかに緩やかに流れていく。しかもそれが街角の喫茶店などでは味わうのとはまったく違った感覚であるのは、もしかしたらあたりに漂う文化とか、芸術とか、そういう空気のせいなのかもしれない。SPA-C(静岡県舞台芸術センター)の役者たちが奥のテーブルで食事をしていたり、リ

ハサルに訪れたアーティストがひと息入っていたり。そんな光景に出会うのも、グランシップならではの、そうした空気を感じながら、次は何を観ようか、と思案するのもまた楽しいものだ。ところで、グランシップ内にあるカフェテリア『燦』、レストラン『オアシス』では、そのメニューを見てわかる通り、地元の特産を実にふんだんに盛り込んでいる。なかには浜名湖産つなぎのオムライス(1,200円)など、静岡にいてもなかなか巡りあえない味もあつたりする。こうしたメニューは、先頃開催された「シアター・オリンピック」の際に訪れた県外の人々や各国来賓の方々にも大好評で、舞台上のパフォーマンスとともに静岡の味のほうもしっかりとアピールできたようだ。また、クローズタイムを利用したパーティーをはじめ、ケータリングなども受け付けているので、何かの機会にはぜひ、相談を。静岡の味わいをさらにひとひねりした、まさにひと味違うパーティーが楽しめるそう。



獲れたて駿河の幸を粋にアレンジ。

レストラン『オアシス』の店内。山下充氏による南仏の海をモチーフとした油彩画が『燦』と合わせて8点掛けられている。こちらもクローズタイム(PM2:30 ~ 5:00)にはパーティーも可能。

レストラン『オアシス』
OPEN / AM11:00 ~ PM9:30(PM9:00オーダーストップ)

人気メニューベスト5

- 1 地場産オリジナル料理(ランチのみ)... 1,200 ~ 1,500円
- 2 週替わりランチ 1,000円
- 3 駿河湾産桜海老のドリア 850円
- 4 特製ローストビーフカレー 1,300円
- 5 木の子とベーコン・ホーレン草のスパゲティー... 930円

シェフおすすめディナー(4,000 ~ 6,000円)など、コース料理もおすすめ。生ビールやワインはもちろん、オードブルも多彩。

『オアシス』のおすすめは、何といっても地場産のオリジナル料理。静岡県の旬の食材を和風・洋風にアレンジ。香草がふんだんに使用されているのも特徴。スープ、ライス、フルーツ(またはサラダ)が付いたランチは1,200円 ~。



県外や外国からのお客様も多いため、地元食材に関する知識も必要だという。

ケーキやドリンクと楽しむ、
音楽のひととき。

クラシック・サロンとジャズ・ライブ

中世の宮廷菓子と楽しむクラシック。ドリンク片手に堪能するジャズ。そんなひとときに関心のある方におすすめなのが、グランシップのオリジナル企画『クラシック・サロン』と『ジャズ・ライブ』。いずれも普段大きなホールでしか聴けない旬のアーティストを小さな空間に招いて聞くもので、『クラシック・サロン』では特注のルネッサンス期の宮廷菓子がワインあるいはティー付き、また『ジャズ・ライブ』にはドリンクがサービスされる。くつろいだ雰囲気の中、耳も舌も満足。と、まさに音楽ファンにはたまらない、贅沢の上ないプログラムである。

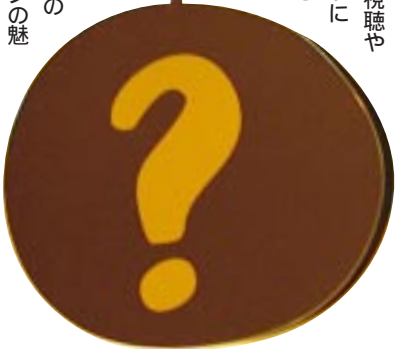
知る



これだけ情報に溢れた世の中だと、欲しい情報を必要な量だけ取り出すといことはなかなか難しい。要は、何の情報を、何で、どう取り出すか、なのだが。

グランシップに関する情報に限って言えば、メインエントランスから入るすべての左手にあるインフォメーションカウンターに向くのが、やはり最も手取りはやく、確実だ。ここには先々の予定が一目でわかるイベントカレンダー『ON the board』をはじめ、各イベントチラシや本誌『グランシップマガジン』G、さらにはグランシップ内の各ホール・施設を紹介したパンフレットが揃っている。これは！と思えば、その場でチケットを入手することもできる。

少し勉強してみたい、という人には、情報ラウンジがおすすめ。一般の書店ではあまり見かけない、その道の専門誌が豊富に取り揃っており、ビデオの視聴やインターネットによる情報検索も可能である。また、県立中央図書館の本もこのラウンジの魅力の一つ。コンピュータによる図書の検索、予約システムなどを使って午前中に本を予約すれば、夕方には中央図書館から配送され、ここで受け取ることができる。



②が目印のインフォメーションカウンター。プレイガイド、館内案内はもちろん、迷子、落とし物もこちらで。なお、イベントに関する問い合わせは電話でも受け付けており、また専用ホームページも設けている。
TEL054-289-9000
<http://www.granship.or.jp>



ときにタイムリー、ときに奥深く。
情報・知識を意のままにゲットする。

情報ラウンジ

ラウンジ内の雑誌やビデオの閲覧、インターネット端末の利用のほかに、静岡県立中央図書館本館にある図書、ビデオの検索、リクエスト(予約)、貸出、返却も。なお、貸出には貸出カードが必要なので、初めての人は住所を確認できるもの(運転免許証、保険証、学生証など)を持参の上、申し込みを。県外在住の方も利用可(但し、ビデオは除く)。
利用時間 / AM9:00 ~ PM10:00 但し、貸出・予約はAM10:00 ~ PM1:00、PM2:00 ~ PM9:00

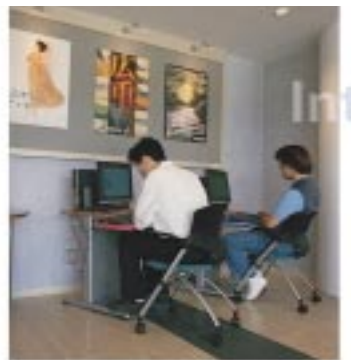


県立図書館の本もここに。

情報ラウンジには、一般の流通には乗らないような、音楽・舞台芸術・スポーツに関する専門誌が約70タイトル揃っている。また、アメリカの音楽新聞『MELODY maker』も。



ラウンジ内のプラズマディスプレイ。グランシップで行われた公演のビデオを放映することもある。他に閲覧用モニターもあり、借出用ビデオ1本なら収録時間内、2本以上の場合は1時間以内で視聴可能。ソフト数は雑誌と同様、音楽・舞台芸術を中心に約200本。今年中には約500本が揃う予定。



インターネット端末は2台。情報検索は一人1回につき30分まで無料で利用できる。



グランシップのスケジュールが一目瞭然のイベントカレンダー『ON the board』や、本誌『G.』も、インフォメーションカウンターで入手できる。



イベントの際などでわからないことがあったら、グランシップサポーターに気軽に質問を。ご覧の服装が目印。

買う

HOW TO GET

館内のインフォメーションカウンターで購入できるチケットは、グランシップで開催されるものだけ、そう思い込んでいる人が案外多いのではないだろうか。しかし、実はここは『ぴあ』のプレイガイドでもあり、静岡県内外で行なわれるコンサート、イベントのチケットも扱っている。備えつけの雑誌『ぴあ』をバラバラとめくって、グッとくるものがあれば、即チケットキープ。そんなことが手軽にできるのもうれしい。



『ぴあ』のチケットもインフォメーションカウンターで購入できる。

得する

HOW TO PROFIT

3月のオープン以来、グランシップを訪れた人は、すでに延べ50万人を超えた。中にはもう2度3度と足を運んでいる、という人も少なくないだろう。というわけで、そんな人にはぜひ『グランシップ友の会』に入会されることをおすすめしたい。メンバーになると、静岡県文化財団が指定する公演やイベントのチケットが10%割引となるほか、チケット先行予約や提携店割引など、さまざまな特典がある。なにしろ今後もグランシップには楽しいプログラムが続々と控えている。ここで入会しておいて決してソンはないと思うのだが。

公演・イベントがおトクに楽しめる特典いっぱい『グランシップ友の会』。



『グランシップ友の会』の会員タイプは3種類。年会費はそれぞれレギュラー会員2,000円、カード会員3,000円(別途Nicos年会費が必要)、法人会員20万円。申し込み・問い合わせは、グランシップ友の会事務局: TEL054-203-5714まで。詳しくはP27を参照のこと。



大ホールのアリーナ席



大ホール5階のバルコニー席



情報ラウンジ、3階ロビー



お気に入りの椅子は、どの椅子？ 館内座り心地図鑑。

グランシップの密かなこだわりは、実は椅子にある。フォルムの美しさだけではなく、感触や座り心地の点から厳選された椅子たちをこうして集めてみると、なるほど圧巻。たとえば会議室の椅子は、長時間でも疲れない人間工学を極めたカタチ。また、ホールの椅子には、心地よさと豊かさを兼ね備えた付まいがある。ロビーやホワイエでも、サロンの雰囲気を持つ優雅な椅子、友達と気さくにくつろげるソファ...と、さまざまな椅子に出会えるのもまた、グランシップならではの愉しみ。待ち合わせに、芝居の幕間に、あるいは歩き疲れて、ふと腰をおろしたとき、あらためてその存在に目を向けてみるのも面白いのではないかなと思う。



12階特別室の革張りソファ。NY近代美術館永久展示品のレプリカ



中ホール



11階大ホール側のロビー



特別室の モンローチェア



情報ラウンジ



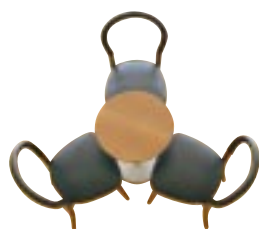
特別室



6階交流 ホール



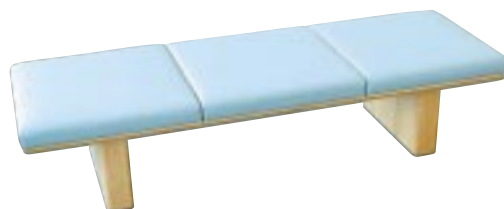
大ホール1階の ホワイエ



中ホールのホワイエ



会議ホールの傍聴席



10階展望ロビー



10階展望ロビー



グランシップ広場



9～12階会議室



会議ホールの
テーブル付きスタッキング



2階ロビー



グランシップ広場



10階・12階会議室の高機能事務椅子



会議ホールの革張りの椅子



2階ロビー

谷川俊太郎「二十億光年の孤独」より ～21世紀の若者達に捧げる～

Moving Music Express

ムービング ミュージック エクスプレス

40メートル四方の大空間がステージになる。スタジアムになる。

歌い、語り、踊り、演奏する……その動きの中から紡ぎだされるストーリー。

“ムービング ミュージック エクスプレス”と名づけられた

この「動き」の総合芸術パフォーマンスはいよいよ8月21日、

世界で初めて、このグランシップ大ホールで披露される…。

それは世界初、
動く音楽のパフォーマンス。

アトラクタオリエンティック開会式でのアトラクションを覚えているだろうか。オペラでもなく、ミュージカルでもない「動き」を中心に、演奏、歌、踊り、語りといったさまざまなジャンルが一つになった総合芸術。そこには豊かな音楽性やドラマとともに、集団演技ならではの動きの美しさ、そして、何よりも沸き立つような強烈なエネルギーがあった。

そして、これはあのアトラクションをヒントに生まれたという、ムービング ミュージック エクスプレス。世界初のこの総合芸術パフォーマンスにそつした名がつけられたが、これはその名の通り、「動く音楽のパフォーマンス」である。マーチングバンドや吹奏楽、舞踊、合唱、朗読が融合され、紡ぎだされてゆく一つのストーリー。開催日は、県民の日にあたる8月21日。もちろんこの壮大な音楽スペクタクルの紡ぎ手は、県民である。

壮大なストーリー。
ダイナミックなステージ。

ストーリーは、宇宙の誕生に始まる。荒涼とした風の音、ツァラトゥストラはかく語りきで幕を開ける象徴的なプロローグやがて太陽が生まれ、惑星が現われ、そして、生命が産声をあげる。怒り、哀しみ、希望と喜び……。

モチーフとなっているのは、谷川俊太郎氏の処女詩集『二十億光年の孤独』である。

当時21才だった詩人の瑞々しい感性が大ホールのアリーナを静かに、かつ強烈に満たしていく様子は、想像するだけでも胸が震える思いだ。

一方、それらの詩を朗読するのは俳優であり、最近では画家としても活躍する榎木孝明氏。広く知られるそのふくよかな声質、語りの向こうに、観客は果たして何を見るのだろうか。



谷川俊太郎氏21歳のときに綴った処女詩集『二十億光年の孤独』がモチーフ。

グ、合唱、吹奏楽演奏、パーカッション演奏といったパフォーマンスを中心に、光と音の効果で彩られる。緩急をつけたドラマチックな音楽、静と動の対比からなるダイナミックなステージは、見ているものを決して飽きさせない。否、それどころか、パフォーマンスが放つエネルギーに観客たちは圧倒され、いつしか自分もまたストーリーを語る一人になっていることを実感することだろう。そして、ぜひとも、ステージに流れるムセージを胸にしかりと受けとめて帰っていただきたい。

宇宙・生命の悠久の流れにおいて、自分はどこに存在するのか。また、どこに向かおうとしているのか。さまざまな社会不安の中で迷う若者たち、大人たちに、生命の神秘、命の尊さ、人間の尊厳を思い起こし、元気になるてもらいたい。希望と喜びをもつて21世紀を迎えてほしい……そんな願いを込めて、21世紀の若者たちに捧げる、ムービング ミュージック エクスプレスの県民出演者がパフォーマンスとともに熱くムセージを語る1時間半である。

総勢およそ500名。県民が創り、プロが支える。

県民自身の手で創造するイベントとは

昨日の奥の十億年
明日の奥の十億年

人類は小さな球の上で眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする

谷川俊太郎作「二十億光年の孤独」より

この壮大なストーリーは、舞踊、マーチン

優先させるべきは、ストーリーよりも出演者のエネルギー。人が集まった、そのエネルギーは大きなチカラになるから。



集団演技の指導のポイント「それぞれの気持ちをどう引き出し、どう一つにまとめるか、ですね」

総合演出

山崎 昌平

Shohei YAMAZAKI

立教大学経済学部卒業後、66年より80年まで日本初の本格的マーチングバンド《日本ビュウグルバンド》にてドラムメジャー、バンドディレクターとして活躍。千葉国体を皮切りに、全国20都道府県の『国体』『インターハイ』『全国植樹祭』などでマーチング及び集団パフォーマンスを指導のほか、東京消防庁特別職員、自衛隊音楽祭マーチング担当として活躍。現在、日本マーチングバンド指導者協会公認指導員としてイベントを手懸ける一方、全日本マーチングバンド&バトントワリング連盟副理事長を務める。

フォーメーション。しかし、それはすべて当日のお楽しみ。

「とにかく楽しんでいただきたい。最終的には、見る人と出演者がどこで一緒にいるか、なんですね。見る人も拍手で参加するつもりで、よかったときには惜しみない拍手を。参加者たちはそれがあって初めて、次も頑張ってみよう、と思えるわけですから」



ムービング ミュージック エクスプレスは世界初の試み。そこにはどんな感動が待っているだろう。

音楽監修・ピアノ

伊藤 康英

Yasuhide ITO

作曲家。東京芸術大学作曲科、同大学院修了の後、日本音楽コンクール作曲部門など、数々の入賞を果たす。これまでに40作近い吹奏楽曲を発表し、なかでも交響詩『ぐるりよぎ』の作曲者として世界に知られる。また、歌曲作家としても親しみやすいメロディーを次々と生み出し、一方、ピアニストとしても活躍。CD作品に吹奏楽作品集『ぐるりよぎ』。歌曲作品を収めた『林望教情小曲集 あんこまパン』などがある。2000年のとやま国体では、入場マーチの作曲を担当。現在、芸大などで講師を務める。静岡県浜松市出身。

パーカッション

ザ・バース

The Birds

東京芸術大学同期生、長谷川友紀、神田佳子、佐々木啓恵によるパーカッション・トリオ。93年結成の後、95年に初リサイタルを開催。98年3月には東京芸術劇場においてコンピューターやシンセサイザー、サンプリング等によるビートとパーカッションによる人間的なビートが織り成す刺激的なリズム世界『The future of beat』を開催し、好評を得る。また『TEMPUS NOVUMU6』現在形の音楽 95近藤謙 打楽器作品展』等、作曲家グループとのコラボレーションも数多く行なうなど、常にパーカッションの可能性を追求している。

サクソフォーン

須川 展也

Nobuya SUGAWA

サクソフォーン奏者。東京芸術大学に学び、第51回日本音楽コンクール管楽器部門第2位(1位なし) 第1回日本管打楽器コンクール・サクソフォーン部門第1位を受賞し、デビュー。文化庁派遣による各国リサイタル、オーケストラとの共演等においてヨーロッパ、アメリカでも高い評価を得る。現在、芸大講師を務めるほか、東京佼成ウインドオーケストラのコンサートマスター、サクソフォーン四重奏団《トリヴェール・クワルテット》のリーダーも務める。94年度村松賞、第4回出光音楽賞のほか、受賞歴多数。

朗 読

榎木 孝明

Takaaki ENOKI

俳優。武蔵野美術大学デザイン科に学んだ後、劇団四季に入団。81年『オンディーヌ』で舞台初主演。83年には劇団を退団し、NHK朝の連続テレビ小説『ロマンス』に主役でテレビデビュー。その後、俳優として映画・テレビ・舞台で活躍の傍ら、アジアを中心に旅のスケッチを描き、ネイチャリング番組にも多く出演している。代表作に映画『天と地と』『天河伝説殺人事件』。NHK大河ドラマ『独眼竜政宗』『毛利元就』。舞台『ラブ・レターズ』『バルコ劇場』『胡桃・私が愛したハムレット』『東京グローブ座』など。

びにあふれたステージ。この世界で初めてのビッグイベントに期待は高まるばかりだ。

昨日の奥の十億年
明日の奥の十億年

アンドロメダ星雲とオリオン星雲との地球に関する事務的な会話

机の下のヒヤシンス
おやつのココロレイト

せいせい無限ほどの体積しか持たない人間の頭脳
しかるが故の感情の価値

谷川俊太郎作「周囲より

Moving Music Express



8/21 SAT PM 1:30開場 PM 2:30開演

会 場＝グランシップ大ホール・海

入場料＝指定席2,500円 自由席1,500円(一般)800円(小・中・高生)

語 り / 榎本孝明

演 奏 / 須川展也(サクソフォン) ザ・パース(パーカッション)

静岡県立浜松商業高等学校吹奏楽部

静岡市立商業高等学校吹奏楽部

静岡英和女学院中学校 高等学校吹奏楽部

静岡市立森下小学校 brassバンドクラブ

ダンス / 佐藤典子舞蹈団

合 唱 / 静岡フラウエンコール

藤枝フラウエンコール

藤枝少年少女合唱団

音楽監修・ピアノ / 伊藤康英

総合演出 / 山崎昌平

■主 催＝財団法人 静岡県文化財団

■後 援＝静岡県、静岡県教育委員会

■制作協力＝ヤマハ株式会社音楽企画プロジェクト

チケット取り扱い

グランシップインフォメーションカウンター TEL.054-289-9000

すみや静岡本店ソフト館プレイガイド TEL.054-251-1233

ヤマハミュージック浜松 TEL.053-454-4440

ローソンチケット(Lコード40125) TEL.052-290-9900

お問い合わせ

グランシップインフォメーションカウンター TEL.054-289-9000

観世清和

三間四方の舞台の上で。

「足利義満氏ゆかりの金閣寺において

父が翁、私が千歳を勤めたことがございました。

先祖ゆかりの地でもあり、

観阿弥世阿弥親子もこうして『翁』を勤めたのかと
しみじみ感慨深いものがございました」

家元業というもの。

その日、観世流二十六世宗家は翁を舞った。すべての演者が精進潔斎して臨むこの曲は、五穀豊穡、国土安穩を祈禱する神聖な一番。「とうとうたり…」と謡いだすと、その声にあたりの空気がスッと道をあける。それはまぎれもなく、宗家が放つもの、のチカラであつた。観ている者を滔々と満たす、神々しさと清々しさ。そんな身の引き締まるような感動を胸に、演能後の宗家を楽屋に訪ねた。

——この度は、静岡県能楽鑑賞会から寄贈された能舞台のこけら落としということでございましたが、まずは公演を終えられての感想、ホールの印象などからうかがわ

せてください。

「新幹線を降りまして、駅から車でずっとこちらへ参りますときに車窓から拝見しましたが、それはもう大層立派な建物でございますね。なんでも駅まで新しくお造りになったといつて。これだけ立派な建物ですので、中身もぜひ、内容のあるものを大いにおやりになっていただきたいと思っています」

——「ご宗家はニューヨークのメトロポリタン美術館をはじめ、パリ、インドなど、海外でも数多く公演されておられますが、空間、空気の違いはお能の完成度にどのように影響するものなのでしょう。能は緊張の美学などといわれますし、空気みたいなものが非常に大きく関わってくるように思われるのですが。」

「私どものホームグラウンド、観世能楽堂が東京の渋谷にございますが、これは稽古や申し合わせ、リハーサルを通じて私どもが慣れ親しんでいる舞台でございます。能では運びと申しまして、すり足をいたしますが、観世能楽堂ならば、何も考えずともある地点からある地点まで同じ歩数で行くことができます。それが私どものホームグラウンドではない、しかも能楽堂ではない、本日のように劇場にいゆる所作台を敷き詰めたホールですと、同じ三間四方に立ちましても、空気、匂いが違いますね。そして、海外となりますと、ますますもつて違ってきています。それゆえ新鮮な発見をすることもございますが、今申し上げたように、いつもは六足なのに今日は八足行かなければ、などということがありまし

て、これは演者にとっては大変大きなことなんです。特に能の場合は面おもてを付けますので、素顔、素のままの稽古が大事になってくるわけです。つまり、日頃稽古を重ねている空間とそうでない空間とは微妙な違いがあり、それが良くも悪くも演者に影響を与える、ということとは確かにございますね」

——日本では、能は難しいもの、予備知識がなければ観てはいけないもの、という先入観を持たれる方も多いようですが、海外と日本のお客様の違いを舞台でどのように感じられますか。

「日本の場合は能に限らず、たとえば他ジャンルでも、知ってて当然、こんなことを聞いたら失礼、大恥ものだという意識がございますね。これはある意味で日本の文化の特性だと思つのですが、海外では投げたボールがまっすぐに返ってくる。もうと率直で素直ですね。もちろん言葉は理解できないと思いますが、でも、いいものはいいと。全身で観てらっしゃる。能を楽しもう、文化を理解しよう、という気持ち海外の方がずっと素直なような気がします」

——ところできょうの演目は『翁』でございます。先々代が随筆の中で、翁は何べん舞つても、そのたびに心身の新たなものを感じる。……よくぞ能の家に生まれてきたと思つと記されていましたが、ご宗家自身は観世流のお家柄であることをどのように受けとめておられますか。

「それは難しい問題でございますね。家元業という重責を担わせていただいてお

写真提供：静岡新聞社



静岡県能楽鑑賞会から県に寄贈された能舞台のこけら落とし公演は、観世宗家の『翁』で幕を開けた。（6月26日、グランシップ中ホール・大地）

りますが、食事もすれば、酒も飲みます。私も生身の人間でございますので、やはりどこかで現実逃避をしたいという願望もございます。それに私どもの世界では、家元といえども舞台で勝負することが根源であると思っております。もちろん舞台がいりませんが、自分としてはやはり一番一番、出来不出来は別として、充実感をもつてお客様にお見せするといつことが、能の家に生まれた者のまず第一の勤めであると思います。そのうえで自らの芸道を極め、また家元として流儀をとりまとめていく。これは一生の課題ではないでしょうか。亡くなった父も、家元とはいつあるべきもの、などとは一言も申しませんでしたし、亡くなるまで本当にいろいろな思いで悶々としていたのでは、と思つのですが」

現代に生きる普遍のテーマ。

——四歳で初舞台を踏まれ、三十代早々で家元となられて今日まで、その間にお能に對する意識は変わりましたか。

「やはり家を継いで、家督を相続した自分と、その前の、いわゆる親の七光りで生きていた自分とはかなりの変化がございます。自分では変わらないと思つていても、プライベートな時間、弟たちに指摘されて我に返る、などということもございます。家元云々は抜きにしても、正直な気持ち、能というのは演じる側にとっては非常に辛いもの、苦しいものだと思います。生み

の苦しさ、とてもいまでしょうか。あれだけ稽古したのにダメだった、といつこのほうが多いわけですか」

——一方、お能を取り巻く環境はいかがでしょう。ご数年、薪能もブームとなつておりますし、海外でも人気のようですが、

「まあ、能ブームと申しましようか。全国で開催される薪能の数なんていうのは、それはもう大変な数だそうですね。薪能」という専門の雑誌まで出ているくらいですが、このブームは本当にそのなかと。そういう気がいたします。たとえば、薪能のよつに特設の会場で数千人の観客動員があったとしても、その数千人が果たして能楽堂に来てくださるかという、なかなかそうはいかないわけです。よく経済環境が不況のときほど文化は育つなどといいますが、確かにそういう現象の一つのようにも見えます。しかし、本当に能がそこに根づいているかと申しましたら、それはどうでしょうか。私としては能を一部の方だけに提供申し上げるのではなくて、若い方にもっと気軽に観ていただきたいと思っております。まあ、そういう気持ちから、私どもの流儀でもホームページなどを開設したりして頑張っておるのですけれど」

——これまでで最も思い出深い舞台といえますか？

「これは「くなりました父との一番でございますが、先年、足利義満氏ゆかりの金閣寺で内部外部の大修理がございまして、その落慶のご法要の折に舞つた『翁』が最も思い出に残っておりますね。父が翁で、私



とくに好きな曲は『朝長』と『もなが』、『松浦佐用姫』(まつらさよひめ)など。「佐用姫を演じているときなど、本当は決してあってはならないことですが、涙がこぼれそうな、そういう思いにかられることもございます」

が千歳せんさい)を勤めさせていただいたのですが、先祖ゆかりの地でございますので、観阿弥世阿弥親子もこうして『翁』を勤めたのかな。と。先祖還りと申しまじょうか。父も非常に感激しておりましたし、私も大変しみじみといたしました。金閣寺という、どうしてもきらびやかなイメージが先立つものですが、実際に内部を楽屋として拝借し、池に張りだすように詠えられた特設の舞台で演じますと、とても感慨深く、歴史の重みというものをいたく感じました。

――大道具や背景を用いず、しかも霊や草木の精が登場し、幽玄の世界を展開する能は、馴染みのない方にはますますとらえどころのないもののように感じられるかもしれせん。そこで楽しむためのポイントをお教えいただければと思うのですが。

「能には、ものの哀れがございますね。それがとても宗教性を帯びたものであり、弔ってください、成仏させてください、といった終わり方をしたりするものがあります。現代人の日常生活の中ではなかなか汲み取ることのできにくいものもあると思います。ですが、だからといって私は決して源氏物語や伊勢物語を読んで、「いとか、和歌の一つづらい作れなければ、などと要求いたしません。能の素晴らしさとは何かといえは、その普遍的なテーマではないでしようか。愛だとか、恋だとか、戦争だとか、裏切りだとか。現代人にも通じるものが能の中に生きているんですね。ただ、それを一度ですっきりとわかるつとすると、中には難しいものもあります。しかし、クラン

ックでもワーグナーやブルクナーの大曲をサツと一度聴いて、“ウン、いいね”という人はなかなかいないと思うのです。繰り返し聴いて、耳に残る旋律があったりして、“いいね”になるんじゃないか。と。まあ、素人考えですけれどね。能の場合は、入門編としてまずストーリー性があつて、視覚に訴えるもの、たとえば『船弁慶』のようなものからご覧になるとよろしいんじゃないでしようか。もちろん『井筒』や『野宮』のようにしみじみとした曲をご覧になるのもいいと思います。でも、私としては見た目にも華やかなものからお入りいただくことをおすすめしますね。それから、薪能もいいですね。オープンステージというのは開放感がございますので、“能を観に行く”という構えた気持ちではなく、夕涼みがてら虫の音を聴きつつお能を観ました、とか、煌々と照っている満月のもと、綺麗な女性に出会いました、と。そういうイメージから入っていけるのもよろしいかと思ひます。ですから、能には予備知識が必要、などという意識は、ぜひとも拭い去っていただきたいですね。

――最後に今後のご予定、新しい試みなどをお聞かせください。

「先年、何曲か復曲活動をさせていただきましたのですが、今後は復曲というよりも、現行曲の洗い直しといましようか、古い時代の演出法を少し掘り起こしてみたいな、と。ただ、これは大変時間のかかる作業でございますので、いつになるかはわかりませんが、ぜひやり遂げたいと思っております」



【かんぜきよかず】能楽師（観世流シテ方）。26世観世宗家。59年、観世宗家元正（＝観世左近、25世宗家）の長男として生まれる。4歳で初舞台を踏み、83年観阿弥没後六百年祭で『道成寺』を初演。90年、宗家となる。『鵬』(71年)、『石橋』(73年)、『翁』、『乱』(80年)、『望月』(84年)、『清経恋之音取』(89年)などを開曲。97年にはパリでも公演。第46回芸術選奨新人賞、フランス芸術文化勲章受章。現在、東京芸術大学音楽部邦楽科講師。観世会理事長、観世文庫理事長、日本能楽会常務理事も務める。